

提題

〈Peregrinatio codicorum〉

野 町 啓

この課題にみられる二つのコンセプト、「古代末期」及び「カロリング・ルネッサンス」それぞれが、容易に結論を出しがたい難問を含んでいる。まず「古代末期」についていえば、時代の上限・下限をどこに設定すべきかという問題がある。これは、かつて歴史学をにぎわせたロマニストとゲルマニストの対立を背景とする「古代・中世連続vel断絶(境界)問題」と深くかかわっており、ひいては「中世」という時代をどう評価すべきかという大問題が背後にあるとあってよい。しかもその根底には、歴史学者のナショナリズムとでもいえる問題があるのであって、「中世」を文化的・思想史的に「暗黒時代」とみなすことは、もはや時代遅れの一昔前の通説だとして一蹴してすむほどには簡単な問題ではない。さらにそこに「カロリング・ルネッサンス」が加わると、問題は一層複雑になってくる。

〈Renaissance carolingienne〉は、J. J. Ampèreが1839年に刊行した *Histoire littéraire de la France avant le XII^e siècle* で用いたのがおそらく濫觴だと思われるが、「ルネッサンス」というコンセプト自体には、前代を文化的に不毛な暗黒時代とみなす前提が暗黙裡にある。そうすると、いわゆる古代末期とカロリング時代の間知的断絶を前提にはじめて、「カロリング・ルネッサンス」をいいうることになるのではないか。だが、時代区分の問題はさておくとしても、カロリング期以前に、C.Courtoisのように、5世紀末以降北アフリカに〈Renaissance vandale〉を説く者や (*Les Vandales et l'Afrique*, Paris, 1955)、これとは比較にならない影響力を持つ5世紀後半から6世紀前半、東ゴート支配下のイタリアに〈Le Renaissance de l'hellénisme〉の展開を主張する、P. Courcelle (*Les lettres grecques en Occident*, Paris, 1943, 3^e partie) の説がある。こうした例証からすれば、これ以降8世紀フランク王国の成立(カールの登位は768年)までは暗黒時代であったということもできよう、だがここで問題を一層複雑にしているのは、当面の課題に、「知の断絶か連続か」

という限定が付されていることである。ここで問われているのは、単に7世紀以降文化の死滅した時代が存在したか否かといった漠然としたことではない。古代末期に固有の知の形態・思想があり、それが8-9世紀において消滅したか、あるいは独自の形態において変容しつつ展開したか、そのいずれかの検討が求められているということもできるからである。

古代末期の知的アイデンティティを何に求めるべきか、これについてはさまざまな説がある (cf. Cameron, A., *The Mediterranean World in Late Antiquity*, London & N.Y., 1993, chap. 6)。例えば、古代末期に成立した知の形態としては、一般的に「ネオプラトニズム」が挙げられよう。先の Courcelle が、東ゴート王国にギリシア思想のルネッサンスを主張した有力な根拠は、ほぼ同時期にアンモニオスを中心にアレクサンドリアを拠点に展開したネオプラトニズムの形態のポエティウスによる撰取と援用に求められる (cf. Courcelle, *op. cit.*, pp. 268 sqq.)。この説は、ポエティウスの留学先をアレクサンドリアとすることを軸としているが、これに対しては、周知のように資料上の問題があり、ポエティウス自身のアリストテレス註解書に、シュリアノスの名は挙げられていても、ポエティウスが警咳に接したとされるその弟子に当のアンモニオスについての言及が皆無であること等難点があり、この仮説に対してはさまざまな反論がなされてきた。

しかし、当面の問題との関連で注目すべきことは、たとえポエティウスの留学先がアレクサンドリアであろうとなかろうと、文献上の裏付けいかんにかかわらず、彼はほぼ同時代のアレクサンドリアの有力な思潮の知識を獲得しえたと十分に考えられることである。換言すれば、古代・中世世界における情報伝達速度は、空間的にも時間的にも現代のわれわれの想像を絶したものであることを銘記しておく必要がある。古代に例をとるならば、1966年アフガニスタン (古代バクトリア王国) 北方国境アイカーヌムの古代ギムナシオン遺跡で発見された碑文を挙げるができる。それには、約5000キロ離れたデルフォイ神殿の柱にあるのと同じ格言が刻銘されており、それはアリストテレス門下、ソロイのクレアルコスが旅の途次もたらしたものと発見者ロベールにより推定されているのである (cf. F. W. ウォールバンク『ヘレニズム世界』第4章)。中世についていえば、カロリング・ルネッサンスにとって重要な拠点の一つである St. Gall の Stiftsbibliothek をかつて訪れた際、そこにイシドルスの *Synonyma* の一部が筆写されたパピュルス断片 (Handschrift 226) が展示されている

のを一瞥したことがある。パピルス写本は、8世紀頃まで存在しており、教皇庁文書では11世紀まで使用されていたとされ (cf. Bischoff, B., *Latin Palaeography*, 1990, Cambridge, p. 8. 35), それ自体珍しいものではない。しかし、このイシドルス断片は、スクリプトから7世紀中葉南フランク王国成立と推定されており (cf., Schmuki, K., et alii, *Cimelia Sangallensis*, pp. 22-3), *Synonyma* の成立年代は不明であるが、イシドルスの没年は636年であることを考えるならば、ほぼリアルタイムで写本が制作されていることになり、伝達の早さに驚くほかはない。

ここでポエティウスに話題をもどすならば、彼の岳父シュンマコスには、例えばプリスキアヌスに著作を依頼したことが示すように、同時代のビザンツの有力な知識人達と親交があり (cf. Kirkby, H., *The Scholar and his Public*, in *Boethius*, ed. Gibson, M., 1981, pp. 59 sqq.), こうした回路を通してアレクサンドリアの知的ミーリュに関する情報に接する機会には彼には十分にあったと考えられる。ただしだからといって、彼の影響力により、アレクサンドリア的ネオプラトニズムの形態が (K. Praechter が1910年 *Richtungen u. Schulen im Neuplatonismus* や1912年 *Christliche-neuplatonische Beziehungen* において提起したこのコンセプト自体問題をはらむものではあるが)、彼の同胞知識人の間に浸透定着したと考えるのは、早計としかいいようがない。彼は、同時代の知識人にとっては、傑出したバイリンガルの使い手として、また学匠詩人として高く評価されてはいても (エノディウス、カッシオドルス)、思想家として重視され、着目されていたわけではない。後に名声を博することになり、ネオプラトニズムの影響の痕跡が著しくみられる *Consolatio Philosophiae* は、彼の処刑後発表されたものであり、公刊の経緯は不明であって、後にふれるように9世紀までは写本は存在してはいないのである。彼に関するこうした諸論点は、彼の生誕1500年を記念して、M. Gibson 女史の編集により1981年刊行された、*Boethius, His Life, Thought and Influence* におさめられた諸論稿が余すところなく示している。ポエティウスなりネオプラトニズムをパラダイムとして設定し、カロリング・ルネッサンスとの連続なり断絶を検討することには無理がある。ポエティウスによるポルフェリオスの *Eisagoge* のラテン語訳なり註解がカロリング期に重用された事実があったとしても、カロリング期におけるネオプラトニズムを語ることは、ナンセンスの誇りを免れないであろう。カロリング・ルネッサンスとほぼ同時期、東方で展開したマケドニア・ルネッサンスについてであれば、東方神学の成立とのかかわりにおいて、ネ

オプラトニズムを紐帯として、古代末期との知の在り方を通時的に検討することも可能であり、またそれなりの妥当性を有するといえるであろう。しかしこの指標を西方ラテン世界に適用することは適切ではない。

では、古代末期とカロリング・ルネッサンス——ここでは一般的な通念として両コンセプトを用いることにするが——の間に、両者を架橋する紐帯は全く考えられないのであろうか。以下、筆者の知識の限界もあり、清水教授がカロリング・ルネッサンスそれ自体について詳細な考察をされると思われるので、ポエティウスの時代から9世紀初頭までに時代を限定し、「写本の流布」の問題をメルクマールとして与えられた課題を検討してみたい。この間は、周知のように、修道院制度の確立と共に、Scriptoriumにおける写本の制作が活発になされ、諸写本が各地の修道院のネットワークを通して流布し、Stiftsbibliothekが設立されていった時代だからである。こうした動向は、メロヴィング時代に胎動しており、それを例証するのが、6世紀末から、コロンバヌスを中心とするScotti達が伝道・布教のために行った、〈Peregrinatio pro Christo〉のモットーの下での遍歴である。そしてその過程で、Luxeuil (590), Bobbio(614), St. Gall, Corbie等の写本伝播の拠点とでもいうべき修道院が設立されており、8世紀以降、ボニファティウスによるFulda修道院の創立(744)を嚆矢とするアングロサクソン系の活動がみられるわけである。とりわけカロリング時代は写本制作が活発になされた時期であって、例えば、カールの姉妹ギゼラの運営下にあったパリの東Chollesの修道院にあっては、修道女達もそうした活動に従事したといわれている (cf. Bischoff, B., *op. cit.*, p. 207)。

ここでポエティウスを例にとるならば、M. Gibsonは、先に挙げた論文集に寄稿した“The Opuscula Sacra in the Middle Age”の中で (p. 220)、彼の時代とカロリング期の間にはgulfが存在する、と述べている。つまり、8世紀後半まで、彼の著書の写本は伝存してはいない。しかしこのことは、彼の写本の完全な消滅を意味するわけではなく、それがただ埋没していたことを意味するにすぎない。コメントリーを含めて、彼の写本の伝承史については、古典的といってよい、P. Courcelle, *La Consolation de Philosophie dans la tradition littéraire* (Paris, 1967)があり、Gibson編集の論文集にも、個々の著作について、*Opuscula Sacra*については前掲のGibson女史の論文、*Consolatio Philosophiae*についてはJ. Beaumontの“The Latin Tradition of the *De Consolatione Philosophiae*” (pp. 278-305)があり、近年のものとしてはCour-

celleの補正として注目すべき、F. Troncarelli, *Boethiana Aetas. Modelli grafici e fortuna manoscritta della 'Consolatio Philosophiae' era IX e XII secolo* (Alessandria, 1988)等があり、さらに筆者は未見ではあるが、M. Gibson及びL. Smithによる*Codices Boethiani. A Conspectus of the Manuscripts of the Works of Boethius, I* (London, Warburg Institute, 1996)が刊行中である。また、個々の写本については、以下しばしば言及するB. Bischoffのモノグラフがある。

こうした伝承史研究をみた場合、ポエティウスが、8世紀末頃、カロリング・ルネッサンスの推進者とでもいべきアルクィヌスを持って再評価がなされたという点は、ほぼ諸家の見解は一致しているといってよい。CourcelleならびにBeaumontによれば、アルクィヌスは*De Grammatica*のプロローグ(PL, CI, 849 C-854 A = *De vera philosophia*)において、自由学芸の本質と哲学とのかかわりについて、ポエティウスと観点を等しくし、そればかりか、*Consolatio Philosophiae* I, pr. IIIの逐語的引用さえみられるというのである(cf. Courcelle, *op. cit.*, pp. 37-46, Beaumont, *op. cit.*, p. 279)。では、なぜアルクィヌスは、神話の利用や思想史的背景において異教的色彩の濃厚な*Consolatio Philosophiae*を利用しえたのであろうか。なぜならば、異教・異端文献の多くは、パリンプセストとして利用されることが多かったことが指摘されているからである(cf. Bischoff, *op. cit.* p. 192)。これについてBeaumontは、アルクィヌスが現在*Anecdoton Holderi*と通称される、*Opuscula Sacra*中四つの論文をポエティウスの真作だと述べているカッシオドルスの断片(*Augiensis* CVI, 現在CCEL, XCVI, pp. 5-6所収)を読み、ポエティウスがクリスト教徒であると確信したことによる、と推測している(*op. cit.*, p. 280)。なおここで、このカッシオドルスの断片が、1877年、カロリング・ルネッサンスとかかわりの深いReichenauでA. Holderにより発見されたものであることは注目しておいてよい(cf. Usener, H., *Anecdoton Holderi. Ein Beitrag zur Geschichte Roms in Ostgothischen Zeit*, Leipzig, 1877, Galonnier, A., *Anecdoton Holderi ou Ordo generis Cassiodorum*, Louvain-la-Neuve, 1997, *Philosophia Médiévaux*, XXXV, 21)。

アルクィヌスについて、ポエティウスとの関連上さらに注目すべきことは、当時のイコノクラズム、クリスト養子説等の対ビザンツ、スペインの司祭達との神学上の論争である。こうした大論争において、アルクィヌスは論理学を有効な手段として重視したことが指摘されているが(cf. Gibson, *op. cit.* p. 215)、その例証として彼は、カ

ールに、アウグスティヌスの偽書 *Categoriae X Aristotelis*, Apuleius の *Perihermeneias* の断片、ボエティウスの命題論註解の editio prima の合本を献呈していることである。献呈にさいし、献辞なり献詩を付すことが慣例となっていたが、Bischoff によれば、彼のそれを付した写本が現在ローマの Casa madre dei Padri Maristi (= CAL 4, 419) に伝存する (cf. Die Hofbibliothek Karls des Grossen, 1965 = *Mitteralterliche Studien*, Bd. III, Stuttgart, 1981, S. 157, なお献詩は *MGH Poetae* I, p. 195)。この写本は、Lyon の大司教、ババリア人レイドラーが筆写し、教会に寄贈したと推定されているが、この人物は、カールの「一般訓令」、特にその第 72 章にみられる修道院、司教座聖堂における教育の振興の主旨に即した活動を実践したことをカール宛書簡で報告した人物でもある (岩村清太訳, P. リシェ『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』史料 33 = *MGH Epist.* IV, p. 542)。この写本の原本は、アルクィヌスの献詩からうかがえるように、もともとカールの宮廷にあったものであり、それをレイドラーが借り出し、筆写したものと考えられ、そこから、カールの宮廷におけるいわゆる Hofbibliothek の存在が浮かび上がってくるのである。

カールは、周知のように、アルクィヌス、パウルス・ディアコヌス、テオドゥルフ等の当代きっての知識人を招聘し、彼の周囲には宮廷アカデミーが形成され、このことが、カロリング・ルネッサンスの存在が主張される所以となっていると見てよい。知識人のメセナとして、有力な知識人を蝟集させることは一つの伝統として、ルートヴィヒ敬虔王、カール禿頭王へと継承されていく。カールの伝記としては、そうした知識人の一人、コロンバヌスゆかりの Fulda 修道院で教育を受け、8 世紀末 Aachen の宮廷に入ったアインハルト (Einhard, Einhardus, Eginhardus) による *Vita Caroli Magni* がある。そしてこれに、後に同じく Fulda 修道院でラバーヌス・マウルスに薫陶を受け、カール禿頭王の宮廷に招聘され、その後 Reichenau 修道院長となったヴァラフリド・ストラボ (Walahfrid Strabo) が「序文」を付している。その中で、「カルロスは賢者を熱心に探し求める点で、かつまた賢者が全く不自由なく安心して知を愛せるような環境を整えることにかけても、あらゆる王の中で最も貪欲であった」と述べられている (国原吉之助訳『カルロス大帝伝』, 1988, 附録)。こうした知的アカデミーには、当然図書館の存在が予想されるが、それを裏付けるのが、アインハルトの *Vita Caroli Magni* 第 4 部にみられるカールの「遺書」の内容である。ここでは、「その大半を蒐集した彼の図書館内の蔵書は、これを所有したいと思う人が、

正当な価格で買いとるべきであり、その代金は貧乏人に分配されることを命ずる」と記されているのである（訳文は国原前掲書による）。さらにその存在と内容を窺わせる資料としては、アルクィヌスのいくつかの書簡が挙げられる（cf. Bischoff, op. cit. S.150）。例えば、カールの孫娘グンドラダ宛書簡（Ep. 309, *MGH Epp.* 4, p. 474）において、彼は、魂の起源に関するアウグスティヌスのヒエロニムス宛書簡（*Epistula*, 131）を、誰かに宮廷図書館の書架の中から（in armario imperiali）探させるように勤めているのである。

Bischoff が、1965 年発表した *Die Hofbibliothek Karls des Grossen (Mitteralterliche Studien, Bd. III, SS. 149 sqq.)* は、カールの宮廷図書館の内実を再構成しようとする貴重な研究である。彼は、この論文において、諸資料や現在ヨーロッパ各地の図書館等に所蔵されている諸写本の特にスクリプトから、Stemmvaeter が宮廷図書館に遡及されうるものの推定を試みている。彼は論文の最後において（cf. S. 169）、仮説を積み重ねていくことは ein Wagnis だと述べてはいるが、彼の所説の詳細に立ち入り是非を論ずることは、Palaeography の素養を欠く筆者の能力を超える。だが、たとえ仮説ではあっても、ポエティウスの時代とカロリング期とを架橋する何らかの要因の存在を問おうとする場合、彼の所説、とりわけカールの宮廷図書館の蒐書経緯に関する仮説はきわめて示唆的である。カールは蒐書活動にきわめて積極的であったといわれ、例えばモンテ・カッシーノの当時の院長テオデマル（Theodemar, 797 年没）に、ベネディクトゥス自筆の *Regula* のコピーを要請したりしている。だが貴重書の蒐書活動にあたって、最も寄与したのは、教皇からの写本の贈与であろう。最初の贈与は、774 年 4 月、教皇ハドリアヌス I 世からの教会法の集成 *Canonum collectio Dionysio-Hadriana* であった（cf. Bischoff, op. cit., S. 151）。そしてカールが 789 年発布した「一般訓令」の前半は、この集成からの抜粋から成ることが指摘されている（cf. 五十嵐修『地上の夢キリスト教帝国——カール大帝の〈ヨーロッパ〉』、2001 年, p. 100）。こうした贈与は、数次にわたって、歴代の教皇からなされたが、当面の問題からして注目を要するのは、800 年から 814 年の間にレオ III 世によりなされた写本の贈与であって、Courcelle は、その中に、カッシオドルスがかつて *Vivarium* で所蔵していたものが含まれているという仮説を提示しているのである（cf. P. Courcelle, *Les lettres grecques en Occident*, pp. 367 sqq., 373 sqq., esp. 377. なお、Courcelle の挙げる個々の写本に対する Bischoff の批判については、cf. Bischoff,

op. cit., SS. 352 sqq., Anm. 17).

カッシオドルスは、後援者であった教皇アガペトゥスの死 (536 年) 後、ローマに学校を建設することを断念、周知のように所領のある Bruttium 東岸 Scylaceum に移り、Vivarium を建てた。Vivarium においては、写本の制作にとどまらず、アレクサンドリアのクレメンス、アタナシオス等のギリシア教父の翻訳活動もなされ、Courcelle は、ヘレニズムの伝統の保持に寄与するところ多大であったと述べている (Courcelle, P., *op. cit.*, pp. 319 sqq.). そこに所蔵されている写本の内容は、彼の著した *Institutiones* から窺知することが可能であるが、彼の死とロンゴバルトの侵入がほぼ重なっており、〈*Codex Grandior*〉と呼ばれる *Vulgata* の貴重な写本を含む蔵書の運命については、消滅説、Bobbio 移管説等が唱えられてきた。しかし Courcelle は、教皇の図書室とでもいうべき Lateran への移管説を主張したのである (cf. Courcelle, *op. cit.*, pp. 342sqq.). その後 Lateran は写本の宝庫となり、所蔵写本は重要な公会議においては資料として活用されたり、教皇による貸与・贈与等を通して、各地に émigré していったというのであり、レオ III 世がカールに贈与したのもまさにその一部であり、その中には、アレクサンドリアのクレメンス及びディデュモスによる『公同書簡』の註解とカッシオドルスによるラテン訳 (GCS 12, p.VLV) といった貴重なものが含まれている。しかも Lateran は、1084 年、ノルマンの侵攻により壊滅的打撃を被ることになるのであって (cf. Thompson, J. F., *The Medieval Library*, N. Y. and London, 1967, p. 141), 教皇のカールへの贈与は、貴重な写本を消滅から救ったことになるわけである。

また、カールの Hofbibliothek の蔵書構成、及びカールの死後の写本の運命に関し、Bischoff は、1961 年発表の *Hadoard und die Klassikerhandschriften aus Corbie* (発表の当初は英訳、ドイツ語原文は *Mittelalterliche Studien*, Bd. 1 1966 所収) において (SS. 49sqq.), 以下に示すような興味深い仮説を提示している。仮説の発端は、B. L. Ullman が 1954 年発表した *A List of Classical Manuscripts (in an eighteenth century codex) perhaps from Corbie* (*Scriptorium* VIII, 1954, pp. 24sqq.) において試みたベルリン写本 Diez B Sant66 (= *CLA* 8, 1959, 1044) の分析である。この写本は、アンギルベルト等によるカロリング初期の宮廷詩と cento 形式の図書カタログから成る。Ullman は、特にカタログにみられる、ルカーヌス、ティグルス、ホラティウス、ユウェナリウスの書名と incipit 及び explicit に着目する。そして、それらがフラン

ク王国北部の有力修道院 Luxeuil の分院として発展した Corbie 出自の諸写本との類似を根拠に、このカタログが、Corbie の修道院図書館もしくはそこに所属していた学僧のものか、あるいは Corbie と縁故のある修道院図書館のものであるという推定を試みている。これに対し、Bischoff が着目するのは、現在パリ国立図書館が所蔵する *Summa theologiae in 13 tractatus* (Ms. lat. 13381) と称されるアウグスティヌスからの抜粋集である。この写本にはハドアルドゥスの名がみられるが、彼こそは、9世紀後半 Corbie 修道院図書館の *custos librorum* として、その充実のために稀覯本の蒐集や写本の制作をした人物である。Bischoff は、この写本と Vaticanus Reg. Lat. 1762 と呼ばれるキケロの哲学上の著作等からの抜粋からなる *Florilegium* (Collectaneum) を比較し、スクリプトから両写本がハドアルドゥスの手によるものだと推定するのである。Bischoff は、さらに現在パリの国立図書館をはじめ、Florence, Leiden 等の有力図書館所蔵の古典作家の諸写本のうち、スクリプトからハドアルドゥスの手になるものと思われるものの一覧表を提示している (SS. 58sqq.)。彼の仮説の大胆な点は、ハドアルドゥスが写本制作にあたって、*Exemplar* をカールの Hofbibliothek 旧蔵のものから借り出したと推定しているところにある (S. 58, Anm. 28)。Hofbibliothek は、カールの死後、その蔵書は、先の遺言の主旨にそって売り立てられ、その一部は Corbie が購入したにせよ、その全てが分散し消滅したわけではなく、例えば《*Libri Carolini*》のような重要なものは存続したと考えられている (cf. Hofbibliothek Karls des Grossen, SS. 167sqq.)。Hofbibliothek からの *Exemplar* の借り出しについては、例えばポエティウスの最古の写本についても考えられている。*Consolatio Philosophiae* の *Stemvater* について、1871 年刊行のトイブナ版では、校訂者 A. Peiper は、それをアルクィヌスがイタリアからもたらしたものと推定している (Peiper, pp. XXIII-XXVIII)。Bischoff は、これが *Bibliotheca Medicea Laurenziana* 所蔵の *pluteus* 14. 15 であり、カロリング期を代表する Philolog, Fulda のラバーヌス・マウルスの門弟セルヴァウス・ルプス (Servatus Lupus) の手によるものと推定している。ルプスは、Seligenstadt に隠棲したカール大帝伝の作者アインハルトに度々書簡を送り、その所蔵写本の借覧を申し出ており (cf. Bischoff, *Palaographie u. fruhmittelalterliche Klassikeruberlieferung*, 1975 = *Mittelalterliche Studien*, Bd. III, S. 63)、ポエティウスの写本もそうした機縁を基に成立したと考えられているわけであり、アインハルト所蔵のものも、Hofbibliothek 旧蔵のものだと推定することは

十分可能である。もっとも Bischoff のハドアルドゥスをめぐる仮説の中で注目すべきなのは、先のパリ国立図書館所蔵の Ms. lat. 1794 が、もともとは S. Germain-des-Prés 所蔵のものであり、それが、1794 年国立図書館に移管されたという事実である。この背景には、写本の〈peregrinatio〉がある。Corbie 写本は、1594 年、Cl. Dupuy (Puteamus or Puteaneas) が入手した。彼は当代の碩学であり、彼の追悼文集には、J. Scaliger といった一級の知識人達が寄稿している。そして彼の子 Pierre 及び Jacques Dupuy が Bibliotheque Royale に関係していた。こうした経緯を勘案し、Courcelle, Bischoff の両仮説を結合すると、まさに写本の〈peregrinatio〉を通して、カッシオドルスの Vivarium — カールの Hofbibliothek さらに現在のヨーロッパ有力図書館所蔵の諸写本が連続性において現れてくることになってくるのである。

提 題 局地的断絶／長期的低落傾向からの回復

清水 哲 郎

古代末期のポエティウスに代表されるような学識と思索は、その後途絶えたように見えるが、やがて西欧中世において、ポエティウスらを受け継ぎ、さらにはそれら先達の肩の上に乗ってであれ、より遠方を見通すような思索の花々が咲くに至る。その狭間で、「途絶えたように見える」時期に何があったのか、実際に知の営みに何らかの断絶が起こったのか、あるいは断絶でなければ何があったのか——私は本シンポジウムのテーマをこのような問いとして捉えた。

1 断絶はあったのか—— literacy の問題

1.1 古代末期にいったん知的文化が途絶えカロリング朝において復活したのであり、その間こそ真に暗黒時代であったといった、大規模な知の断絶という考えは、根拠のないものとして現代の研究者たちがすでに排除した理解であろう¹⁾。ゲルマン諸族は、ローマ世界に侵入してきた際に、多くの場合は既存の文化を根底から壊しはしなかった。彼らもまたローマの文明に染まりつつあったのであって、イタリアやガリ